

おじいちゃんの帽子

西風 そら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前作「河原の囮碁」の番外編。前作未読でも楽しめるよう、心掛けて書きました。ヒ
カル＆佐為と桑原おじいちゃんの、ささやかな邂逅。そしてパンケーキ。

おじいちゃんの帽子

目

次

おじいちゃんの帽子

（Chapter 1）

「こんにちは、

この間は、後ろから脅かしちゃつてごめんなさい。

それから、イカした湯呑み、ありがとうございます。

佐為も喜んでます。

これからも仲良くしてください。

進藤ヒカル

初にお手紙差し上げます。

藤原佐為と申します。

過日は大変失礼致しました。

あと、素晴らしい贈り物をありがとうございます。

傍き身ゆえ、感謝を気持ちでしか現せない事を歯がゆく思います。
ヒカルともども、今後とも宜しくお願ひ致します」

「佐為、お前の文章、堅つてえよな。見てよ、俺の字との、このアンバランス感」

——ヒカルも、大人の女性相手にくだけすぎですよ——

そんな事を言い合いながら書いた手紙を、昼休みに画家女史のイーゼルに置いた。ヒカル以外に佐為が見える人間がいた事は、二人にとつて衝撃だつた。だが、困つた事にはならなさそうだ。

幸い相手は口が固く、幽霊の事にも理解がある感じだ。

出来ればこちらの事をちゃんと知つて貰つて、このまま上手く付き合つて行きたい。

昼食から戻つて来た女性は手紙に気付き、封筒を持ってこちらに小さく会釈した。

ヒカルの向かいに対局相手が座つたので、ヒカルもそちらに集中し、女性はキャンバスの向こうにすつと隠れた。

返信は思いの外早くに来た。

その日の研修が終わつて立ち上がつた所に、福井が封筒を持ってやつて來たのだ。

「これ、画家のお姉さんが渡してくれつて」

イーゼルのあつた板の間を見ると、もう片付けられて無人だ。

いつの間に帰つちゃつたんだか、まつたく気配を感じさせない人だ。

「ありがと、フク」

さつきまですぐそこに居たのに、遠回りな人だなあ……と思いながら、先日の手紙と同じ白い和紙の封筒を受け取った。

「そうそう、スケッチに来るのは今日でおしまいだつて」

「ええっ、そうなのっ？」

「うん、絵の具を使つた作業は自宅でやるんだつて。

7月中には仕上げるつて言つてたよ。楽しみだね」

「うん……」

ヒカルは複雑な気持ちでうなずいた。

フクや他の子供達とは直接話すくせに、なんで俺らだけ手紙なんだよ。

——ヒカル、早く読んでみましょようよ——

「分かった、分かった」

割り切れない思いは取りあえず横に置いておいて、ヒカルは誰にも見られない棋院裏に移動した。

封を開けると、和紙の便箋に今度はいっぱいに、女性らしい細い文字で、

〈自分は生まれついての靈障体质である事。

強い靈に近寄ると、相手の良い悪いに関係なく、体調に異変をきたしてしまって事。

先日の自販機前の事件は、多分自分が原因な事。

だからなるべく自分に近寄らないように、協力して欲しい事)が、説明口調で、箇条書きされていた。

「ホント、素つ氣ないよなあ。でもまあ、体質なら仕方がないよな。避けられてる理由がハツキリして良かつたじやん。

嫌われてる訳じやなかつただろ? なあ、佐為」

沈んでしまつた佐為に、ヒカルが一生懸命元気付けようと話し掛ける。
——私……幽霊なんですね、今更だけれど……——

「もうつ、めんどくさい奴。：あれ?」

ヒカルは、封筒にまだ紙が入つてているのに気付いた。

彼女が素描に使つていい、薄つペらいクロツキー用紙の切れ端だ。

和紙の手紙はあらかじめ書いて、話が通じる相手なら渡そうと、持ち歩いていた物だろう。

後から出て来たこちらは、今日、自分達の手紙を見たあとに、追加で書いたつぽい。
それを広げたヒカルは、後ろでいじけている相棒を振り向いた。

「……! おい、佐為!」

佐為とヒカルの二人は今、棋院から三つ向こうの駅の、古い繁華街に来ている。ヒカルぐらいの年代には縁が薄い、昔からの老舗が軒を連ねる大人の街だ。

「ええつと・・」

ヒカルは、白い和紙封筒から、追加の一枚を引っ張り出した。

「夏の陽射しが心配なので、うちのおじいちゃんに帽子を贈りたいと思っています。

しかし、どうやら私のセンスはおじいちゃんの好みではなさそうなのです。藤原佐為さんはとてもセンスが良さそうなので、棋士にふさわしいカッコいい帽子を見繕つて頂けないでしようか」

——あの方のお祖父様、碁打ちでいらっしゃるのですね——

「センスが良さそうって……」

ヒカルは、帽子屋に烏帽子が無い事を密かに祈つた。

「しかし……うぐう……、何だよこれ」

クロツッキー用紙に帽子屋への地図も描かれていたのだが、それがどうにも分かりにくい。

四角い紙を横に斜めにひっくり返して四苦八苦するヒカルの傍から、佐為も面白そうに覗き込む。

——そんなに分からないですか?——

「だつて、地図つてのは、誰にでも分かる目印を書くモンだろ？」

『駅』は分かるけど…何だよ、この『おとなしい犬』とか『やさしそうなおじさん』とか。

暗号かよつ

——道しるべとしては、ちょっと不適切ですねえ……

「だろつ？」

もがき苦しむヒカルには申し訳ないが、佐為は初めての街並みをけつこう楽しんでいた。

ヒカルに付き合つて歩く日常もそれなりに楽しいのだが、知らない場所に行くのが基本的に好きなのだ。

虎次郎ともこんな風に、新しい土地にワクワクしながら旅をしたなあ：と。
「佐為、なんか、にやけてない？」

——いえいえ、ああ困りました、困りましたねえ、ヒカル——

「ちつとも困つてないだろ、お前」

「あつたぞ、佐為、ここだ、ここ」

同じ道を行きつ戻りつして、やつと、見落としていた小さな路地を見付けた。覗くと、10歩ぐらい先に、渋い山高帽を飾つたウインドウが見える。

「分かりにくつ」

——ヒカル、これこれ！——

佐為が嬉しそうに声をあげた。

彼の扇子で指された先に、首を傾げた白い犬の置物が鎮座する。

路地の入り口にあるレトロなレコード屋のディスプレイだ。

「……『おとなしい犬』（確かに置物だから大人しい）」

まさかなど思つて反対側を見ると、そこは某フライドチキン屋で、例のでっぷりしたおじさんが優しそうに微笑んでいた。

「分かるかあつ！　こんなのつ！」

店に入ると、独特の布の匂いにムツとする。

オーダーメイドも出来るような本格店だが、若向きのカジュアルな物も幅広く置いてあつた。

「手紙には値段の指定がなかつたな。お金持ちなのかな、あの人。

それにもしても、棋士にふさわしいってどんな帽子なんだよ。佐為、分かる？」
——んんく・・私も、装いに関してはトンと疎くて……。

平安時代は、帽子は身分に沿つて賜る物でしたからねえ——

「ちえつ、頼りにならねえの。佐為が名指しで頼まれたんだぞ」

——そうは言われても、こうも沢山あると……

「ま、じゃあ、餅は餅屋に任せるとするか」

店主に声を掛け事情を説明すると、夏向けの上品な紳士帽を幾つかチョイスしてくれた。

「こん中から選べよ、佐為」

——ええと・・かーみーさまの一いーうーとおりい／＼・・これつ――

「てきどーだな」

結果、無難な麻のソフト帽に決定し、それを手紙で指示あつた通り、お姉さんの名前で取り置きにして、店を出た。

「やれやれ、一件落着だな、ああ腹減った

——こんな感じでよかつたのでしょうか――

「ダイジョブだよ、最後はちゃんと佐為が選んだんだもん。ラーメン食べて帰ろうぜ」

言い合いながら歩く二人（他人から見たら一人なのだが）の後ろから、渋いしゃがれ声が掛かった。

「うおーい、院生の小僧」

「?!」

振り返ると、奥まつたカフェのテラス席で、一人の老人が手招きしている。

「えっと、誰だっけ」

——ヒカル！ 本因坊ですよ、桑原本因坊！ 前に棋院ですれ違いましたつ——
佐為がミーハー全開に足をバタバタさせていたる。

「本因坊はお前じやん」

——だからつ・・虎次郎から何代か後に、本因坊家は名跡を囲碁協会に譲つて、それがそのままタイトルになつたんですよ。和谷に教えて貰つたでしょつ——

「そだっけ」

——あのお歳でタイトル防衛記録を更新中だとか。前回の防衛戦も素晴らしい物でした。

ヒカル、早く、早くお側に！——

その場でぐるぐる回る佐為に押し出されるよう、ヒカルは老人のいるウッドデッキに上がつた。

↙ Chapter 3 ↘

この街にしては新し目の小洒落（こじやれ）たカフェで、あちらのパラソルの下では、

女子高生がキヤツキヤ言いながら、テーブルの料理にスマホをかざしている。

「えと、こんにちは、桑原…本因坊センセ」

「ふおふお、まあ座れ、座れ」

二人掛けの席の向かい側を促され、ヒカルは躊躇した。

この人、同じ年寄りでも、うちのじいちゃんなんかとは全然違う。

変なオーラが出でるし 人間じゃないみたいな迫力だ

儀の行き付けじや、何でも美味しいぞ」

れた。

メニューには、お洒落カフェらしいカラフルな料理がズラズラ並んでいる。

しかし緊張して書いてある事が頭に入つて来ない

ヒカルを待たずに老人は手を挙げてウエイトレスを呼んだ

「うひ、寺の山へ、庵、そなへ食がつねは、どす」

「しつ…農が食うんじゃ

「どう？」

白いクリームにカラフルな果物が針ネズミみたいにぶつ刺さった、見上げるようなパンケーキが運ばれて来た。

「ひよつひよー！ 一度これを食つてみたかつたんじや。

だがさすがにお独り様老人が注文するのは、ちとイタイじやろ？

子供でもテーブルにおつてくれればなあと思つておつた所に、お前さんが通り掛かつたんじや」

「それはどうも…」

中学生男子でも、十分イタイんですけど…。

ヒカルは自分の小さいケーキをつつきながら、みるみる片付けられて行く。パンケーキを呆れ目で眺めていた。

——さすがですねえ、ねえ、ヒカル——

(何がだよ)

——囲碁を打つ脳みそには糖分が大量に必要なんだと、先日見た囲碁雑誌に書いてありました。

さすが長年本因坊を張つていらつしやるだけあって、身体の中の囲碁成分が常に甘味を要求しているのでしょうか。そういえば、秀策の時代の優れた碁打ちは、皆、甘い物好きでした――

(俺はお前のその、何でも囮碁に結びつける囮碁脳に感心するよ)

「ん？ なんじや小僧？ イゴノウ？」

ヒカルはハツと口に手を当てた。

佐為に話しかけているつもりが、声に出ちやつてたみたいだ。

「そのつ、囮碁脳には甘い物が必要つて、雑誌で読んで…。

そうつ、昔の碁打ち：本因坊秀策なんかも、桑原センセみたいに甘い物好きだったのかなあつて」

——はい、虎次郎は『すあま』が大好物でしたよ——

お前に聞いてるんじやないつ、このド天然つ！

「ふむ、小僧は秀策が好きか？」

桑原老人はカトラリーを皿に置き、目を細めて聞いてきた。

「えつと、ハイ、好きつちや好きかな。いつかあいつに勝つてやるつて思つてるし」

おつと変な事言つたか？ と心配したが、向かいの桑原は二カツと笑つた。

「儂もじや」

「えつ??」

ヒカルの隣で佐為も目を見開いた。

「秀策は、瀬戸の小さな島から発つて、碁の腕ひとつで、名門本因坊家の跡目にまで上り

詰めた。

儂も地方の片田舎出身じやつたから、そういうのに憧れての。努力さえすれば報われる見本だと、会つたこともないのに、勝手に親しみを感じておつたわ」

「へえ」

素直に関心を示すヒカルの横で、佐為もコクコクうなずきながら聞いている。

「まだ鼻タレ小僧の頃、初めて奴の棋譜に触れた時は衝撃じやつた。

自分との落差に愕然として、そりやもう、落ち込んだわい。

しかしそれが無かつたら、儂は井の中の蛙のままじやつた。

いや、奴の享年の倍生きた今とて、どれだけ奴に近付けているか、怪しいモンじや。

そんな実体の無い亡靈ばかり追い掛けとるから、今ではすっかり妖怪呼ばわりじやわ、カカカ」

老人は、子供相手につい熱弁してしまつてゐる自分に気付き、最後はおチャラけてごまかした。

——だから本因坊タイトルを死守されるのですか?——

佐為の問いかけ・・それをヒカルが代弁する前に、

「同じ時代を生きてみたかったのう」

と、桑原が話題を終わらせてパンケーキに戻つたので、佐為もそれ以上は聞かなかつた。

♪ Chapter 4 ♪

桑原老人が、まさかのメガマウンテンをサクッと平らげた所で、佐為は気持ちを押さえきれなくなつた。

——ね、ヒカル、リュックに携帶用の小さい囲碁、入っていますよね、：ね！　ね！

(あのなあ・お前の気持ちは分かるけれど、プライベート中の大先生に、いきなり玩具の碁盤出して相手して下さいなんて言う勇気、いくら俺でもねえぞ)

——でも、ねえ、ちょっとだけでも――

(打ち始めたら、ちよつとじや済まないだろ。

だいたい、こんな所で真剣勝負なんか始めたら、お店の人に怒られるだろ。

桑原センセに恥をかかせるつもりか？)

——あう・・・――

「どうかしたか、小僧？」

黙つているのに視線をキヨロキヨロ動かすヒカルを、桑原は怪訝そうに眺めている。

「あ、いえ…」

「ところで、儂の願いを叶えてくれたのだから、何か礼をしたい所じやが…」

ヒカルの様子がまた慌ただしくなり、口をイーの形にしたり首を振つたりし始めた。

「…小僧？」

ひとしきり顔芸を披露した後、子供は根負けしたようにガツクリ脱力し、リュックから携帯碁盤を取り出した。

「…じゃ、じゃあ、桑原センセ、一か所、教えて欲しい所があるんデスけど…」

「むむ？ 今からここで一局は、ちと無理じやと思うぞ」

「いえ、違くて…、前回のセンセの防衛戦の最終日の奴…、棋院で棋譜を貰つたんです」「ふむ？」

持つて帰つて二人で検討したのだが、その時に自分が思い付いた手を、どうしても今ここで聞いてみたいと、佐為が駄々をこねたのだ。

そりや、さつきの秀策に対する思い入れを聞かされたら、少しでも盤を挟んでみたくなる気持ちも、分からいでもない。

(ちよこつと質問してます風なら、そう時間もかからないし、お店の人も見過ごしてくれるだろ)

ヒカルは後ろの佐為にせつつかれながら、二つ折りの盤を広げた。

「家で一人で再現してたら、ふつと面白い手を思い付いて」

「ほお」

桑原は、濶みなく石を並べる子供に感心しながら、興味深く盤面を見やつた。
 「ここ……この時に、相手の人が、こつちじやなくて……ココに置いてたら、桑原センセ、
 どうしただろなつて」

「うむ……むむむつ??」

最初半眼だった老人は、すぐに目を見開いて、引き寄せられるように身を乗り出した。
 「なるほど、そこがあつたか……そうかそうか、なるほど……」

小僧、この手は自分で考え付いたのか？」

「いえ……あ、やつぱり、ハイ。たまたまです。たまたま偶然つ」

「ほお、偶然ね……ひやひや、子供はおつかないのう。

・・・だーとーしーたーら——・・

桑原は何だか嬉しそうに、骨ばつた指で小さい石を挟み取ると、ある一ヶ所にカチリ
 と置いた。

「儂ならこう切り返す」

ヒカルの様子が、またおかしくなつた。
 慌てふためく表情、そして何かと葛藤する感じ。

その挙句、しぶしぶという様子で、新たな石を一つ置いた。

「ひやつひやひやひや」

老人の目が、猫のように三日月になつた。

変な笑い声に隣席の女子高生が振り向き、先ほどからこちらを見て眉をしかめていた

ウエイトレスが一步踏み出す。

すわ、やっぱ怒られちゃうか？・・・という所で、本因坊が機先を制した。

「お姉さんや、ぱんけえき追加じや！ 今度はギガエベレスト盛りで！」

目の前で、パンケーキが口から吸收され、シユウシユウと音を立てながらエネルギーとなつて、指先からの鋭い一手に還元される。

ヒカルが初めて目撃する人体の神秘。

(やっぱ人間じゃないよ、この人…)

佐為は佐為で、いつもはヒカルの後ろですまして口頭で伝えるだけなのに、今はテーブルの横に来て、扇で直接打つ場所を指している。

しかも、目をキラキラさせて、めっちゃ楽しそうだ。

(この囮暮バカ…)

やっぱこうなつちやつたじやないか。

プロ試験を控えた院生のヒカルにとつて、確かに、見られるだけでもラッキーな高レバールの応酬ではある。

佐為の熱狂に圧され圧されて、しばらく指示されるままに石を置いていたのだが……（だけれど、このままじゃ……）

そう思つた所で、佐為の扇が、あり得ない一手を示した。

(??)

思わず見上げると、背の高い彼は、扇を口に当てて目を伏せ、こちらを見て哀しそうにうなずいている。

そう、院生ごときのヒカルが、桑原本因坊と互角の勝負なんかしちゃつたら、後々大変な事になるのだ。

ヒカルも目で了解の合図をして、佐為の示した『一見正道だけれど大ボカ』な場所に石を置いた。

桑原が頓狂な顔をした。

ヒカルをなめるように見回した後、黙つて自分の石を置き、それから数手で勝負を終らせた。

「あーあ、負けちゃった、でも楽しかつたです。ありがとうございました、桑原先生」

「ふおつふお、儂に勝つつもりじやつたか。

いやいや、ながなが、一時はヒヤリとしたぞ……しかし…」

老人がもう一度ジツと見据えて来たので、ヒカルはドキドキした。

まさかな…、昨日の今日で、そうそう佐為が見える人間なんて巡り会うもんじやな

いってば。

横目で佐為を見ると、懐っこい瞳で、いとおしそうに桑原を見つめている。

まつたく・・、この全方位囲碁脳・・・

あの画家のお姉さんじやなくて、この人に見えればよかつたのにな、佐為…

Chapter 5

パンケーキの大皿が片付けられたと思つたら、上品な絵柄のデミタスカップがコトリと置かれた。ヒカルの分もある。

「俺、頼んでないけど？」

顔を上げると、先ほどまでのウエイトレスではなく、デニムのエプロンをした初老の男性が、柔軟に微笑んでいる。

「やつぱり桑原さんでしたか。女のコに報告受けて。

ほどほどにお願いしますよ。従業員の手前、注意せにやなりませんから」

男性は、苦言を述べながらもにこやかで、最後だけちよつと肩をすくめた。

「すまんすまん、つい興が乗つてな」

「へえ、桑原さんを愉しませるなんて、大した子供さんですね」

「子供はおつかないぞお」

男性は、はははと笑つて、軽く会釈してから去つて行つた。

「知り合いでですか？」

「ああ、先代からの馴染みでな」

近くに桑原翁の行き付けの仕立て屋があり、待ち時間の折り折りにこのカフェに立ち寄るうちに、顔見知りになつたという。

「昔は渋目の珈琲専門店じやつたが、二代目は流行りに乗るのが上手での。

それでも、そら…その、えすぶれつそ、飲んでみい？」

言われてヒカルは、小さなカップをつまんで口に付けてみた。

本当は缶コーヒーだつて甘くなきや飲めないのだが、この流れでは砂糖なんか入れられない。

「あれ？」

美味しい？

甘くはないのだが、嫌な味が一切しなくて、ヒカルの知つているコーヒーの美味しい所だけ凝縮された感じだ。

「すづごい美味しいです、お世辞じやなく。俺、コーヒーに対する見方が変わりました」

老人はニンマリ笑い、小指を立てて美味（うま）そうにコーヒーを飲んだ。

「あいつも、この味が出せるまで、先代に相当しごかれとつたからな。

客のニーズに応えて流行り物にも手を広げておるが、守るべき物はちゃんと守つとる。

そこの所が変わらん限り、儂はここを聶員にし続けるつもりじゃよ。

あいつは嫌かもしれんがの」

それからカップを置いて、表通りを見やつた。

「この街は、昔ながらの職人が生き続けている街じや。時代の流れで外面（そづら）は変わつてゆくが、根つこの所が変わらんのが、しぶとくて工工感じじやろ。

囲碁の世界も似ていると思わぬか？

職人技のコーヒーも、囲碁の強さも、人が生きて生活するのに絶対に必要という訳ではない。

いわゆる無駄なモノじや。

その一見無駄なモノに価値を見出して、愛しんで守り育む世界が、儂は好きなのじや」

また語り過ぎてしまつたなど老人は、照れ隠しの咳払いをした。

儂とした事が・・・ほとんど初めて話す子供なのに、ついつい本音を喋らされてしまうこの空気は、いつたい何なのだろうな・・・。

大人な話がイマイチ分からずキヨンとするヒカルの横で、佐為は静かに、真剣な面持ちで、老人を見つめていた。

「ま、小僧もいつか和装が必要な時が来たら儂に言え。とつておきの職人を紹介してやるぞ」

「は、はい、そんな日が来るよう頑張ります」

先程の店主がもう一度やつて来て、仕立て屋から桑原宛に電話があつたと伝えてくれた。

桑原の注文品が準備出来たとの事で、ヒカルはキリ良しと、席を立つて挨拶をしようとした。

「今日はこ馳走さまでしたつ。そんで、ホント楽しかつたです。

・・んん？　・・ええつ??」

「なんじや？」

変に慌てる子供に、桑原は不思議そうに覗き込んだ。

(そ、それ言うのかよ、佐為!?)

——是非とも、是非とも、お願ひします、ヒカル——

「どうした、小僧?」

「ええつと、うぐう……本因坊：秀策が……

「む?」

子供は不自然に途切れながら喋ったが、桑原はせかさずに待つてやつた。

「秀策が、もし、今の時代を、覗き見したら……

こんなに世界が変わっているのに、囲碁がちゃんとある事に、もう、めっちゃ喜んで……

この時代の囲碁を愛し育ててくれているすべての人に、感謝感激つて抱き付いて回るだろな……

つて、思います」

「ふおふお、随分フランクな秀策じやの」

「秀策つて、そんな人だつたんじやないかつて気がします……何となくデスけど」

「ふお……」

「じやあサヨナラ! と、ウツドデツキを飛び降りて駆け去る子供を見つめながら、桑

原は何ともいえない素の顔になつた。

♪Chapter 6♪

「もおつ、佐為の頑固者つ。桑原センセ、変にしてたじやないかつ」

帰る道々ヒカルは、さつき無理に言わされた台詞を思い出して、顔から火をほてらせていた。

——だつて、どうしても感謝を伝えたかったのですもの——

「まつたく…」

ふてくされるヒカルに、佐為が神妙に覗き込んだ。

——ヒカル、わがままついでにもうひとつわがままを聞いてくれませんか?——

「えつ、やだよつ、これ以上何があるつていうんだよつ」

——もう一度、あの帽子屋に寄つて欲しいんです。お願ひします、ヒカル——

「ええつ!!」

——私のさつきの帽子の選び方。なんておざなりだつたのでしよう。恥ずかしいです。

この街の職人さんに対しても、私を信頼して任せてくれたあの女性に対しても。

もう一度、ちゃんと真剣に、全力を尽くして選びたいのです——

ああ、もおつ、めんどくさいつ。

と思いつつも、結局、帽子屋に引き返すヒカルであつた。
俺つて、ほだされ体質なのかな・・・

——ヒカル、これ！　これが良いですよ！——

しばらく喰い入るように店内を物色していた佐為が、ある一角で叫びを上げた。
くるりと振り返った目の中には、お星さまマークがキラキラしている。

——白と黒のきつぱりとした色合いが、碁打ちにピッタリです！

おまけに、こここの印！　すこぶる勇猛果敢！　凄く凄くカツコイイです！——

「・・・でも、佐為・・・」

——これこそ私の真剣勝負、心を込めた全身全霊の帽子選びです！——

佐為は、鼻を膨らませて得意満面の『やりきつたスマイル』だ。

(・・まあ、いいか・・・)

多分あのお姉さんは、湯呑みのお札をしたがつてている佐為の為に、『幽霊にでも出来る
お札』を考えてくれたんじゃないかな。

そんで佐為がこんなに嬉しそうなんだから、それでいいじゃないか。

二人は、先程の取り置きのソフト帽を佐為の選んだ帽子と差し替えて、店を出た。

「うわつ、真っ暗。母さんに怒られるな」

——ごめんなさい、ヒカル——

「いいよ。しつかし密度の濃い一日だつた。たまには知らない街もいいよな」

——はい、冒険みたいで楽しかつたです——

駅に向かう道は、帰宅者の流れに逆らう形になる。

小柄なヒカルは、人波に押されながら、えつちらおつちら歩く。

佐為は人にぶつかる事はないのだが、やはりヒカルと一緒に、えつちらおつちら歩いた。

「なあ、佐為……」

——はい? ——

「俺さ、頑張つて、なるたけ早く、桑原センセとイイ勝負をしておかしくないような棋士になるからさ」

「そん時は、今日の続きを打てるよう、センセに頼んでみるよ」

——ホントですか? やつたあ!! ヒカル、早く早く! 早く成長してください! —

「無茶言うな、・・・つたくお前は、大人なのか子供なのか、ホンツト、分かんないな。

まあまでは帰つて、俺とさつきの続きだ」

——はい、ヒカル！——

数日後の、棋院ロビー。

誰もが『それ』に触れようとしない中、意を決した篠田が、猫の首に鈴を付けに行くネズミのような心境で、さつきから無言の本因坊に話し掛けた。
「・・桑原先生が、阪神ファンとは、存じませんでした・・」

～おしまい～